

どうぶつこうえんニュース

Chiba Zoological Park News

No.27



どうぶつと私… (22)

Animals and I

私 と 動物



丸山 幸吉
千葉市動物公園 園長

私の動物に関する記憶の中で、最も古いものは馬であろう。3歳位の頃、家で飼っていたもので、子供と見ると口を開けて向かってくるので、馬小屋の前を通るのが本当に怖かった。この馬も軍馬として、何処かへ連れていかれたと聞かされた時、ホッとしたものだ。後で来た馬はおとなしい馬だった。小学校に入る頃になると、ウサギの世話を任された。冬になるとそれが肉と毛皮になった。又、学年が上がるに従って、ニワトリ、ヤギと世話をする動物も変わっていった。ヤギの乳搾りが朝夕あり、かなりきつかったと記憶している。散歩の相手もヤギだった。ある日、毒団子を食って一晩苦しみ、翌日死んだ。家中で泣いた。私の回りには野性の動物も多かった。ウサギ、キジ、イタチ、時には、ツキノワグマまでも現れた。彼等の領域に入ることもしたが、彼等も、私の生活圏に入ってくる事が多かった。又、初夏のツツドリ、カッコウから、冬のツグミ、ミソサザイ等まで、私の回りには四季を通して多くの生きもの達がいた。いつも豊かな自然があった。子供の頃はその様な中で十分楽しんだ。今でも自然や生きものに対して興味を持っているのは、その影響が大きかったからであろうと思う。特に、自然の保護については関心がある。

誰でも小さい頃の経験が、その後の物の考え方の基準になってくると思われるので、この頃の生活体験を大切にしていきたい。動物や自然を大切にする子供たちを育てるためには、動物に触れ合える機会を多く与える必要があると思う。その一端を担うのは動物園であろうし、又、そこで催される各種の行事であろう。これからも、子供たちと一緒に来る、親、祖父母などの方々にも愛される、そして魅力ある動物公園にしていきたい。

目次

表紙 オセロット	1
どうぶつと私 (22)	2
グラビア カオムラサキラングール	3
飼育レポート ヘビクイワシ	4
飼育レポート DNAのお話②	6
子ども動物園へようこそ	7
特集 写真コンクール	8
動物公園の動物② 動物公園の植物⑫	9
動物公園日誌から	10

動物飼育数

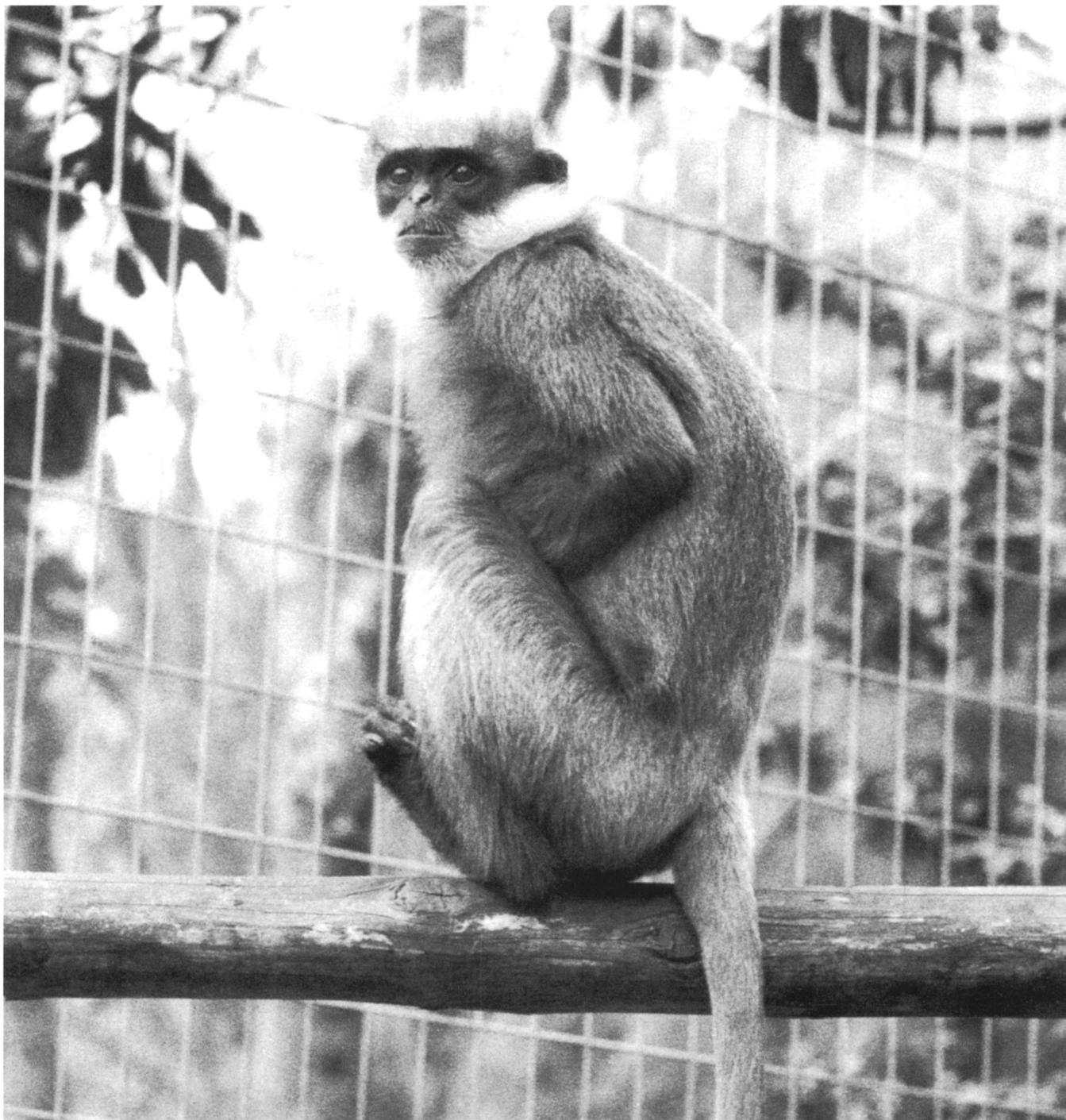
哺乳類	67種	433点
鳥類	90種	378点
爬虫類	4種	20点
両生類	1種	1点
魚類	1種	2点
総計	163種	834点

平成10年 1月末現在

カオムラサキラングール

PURPLE-FACED LANGUR

霊長目 オナガザル科



スリランカの樹林帯のみに生息する珍しいサルで、栗色の冠毛に白い頬ヒゲがあり、体つきはほっそりとしていて体重は5～10kg位です。

10頭前後の小さな単雄複雌群でほとんど樹上で生活し、主として木の葉を食べていて、めったに地上には下りませんが、必要にせまられた時はかなりのスピードで走ります。

1995年の国際動物園年鑑によれば、アメリカに6頭飼育されているだけで、日本でも飼育されているのは現在 助日本モンキーセンターと当園だけです。

秦 舜二 (Shunji Hata)

ヘビクイワシがふえるまで

猛禽舎のならびに、脚がととも長く首も長いちょっと風変わりなワシがいます。その名もヘビクイワシ。現在、国内では7羽が飼育されているだけです。そんなワシが97年に繁殖に成功しましたので、その飼育経過をお話しましょう。

飼育環境への適応

当園では、5羽が88年に来園し、当初環境に慣れるようにと、管理通路側に遮光ネットを張り飼育係を見えにくくしました。

エサは、他の猛禽類と同様鶏頭・マウス・ヒヨコを与え、この他にヘビを与えたほうが良いのではないかとということで、エサ用にヘビを購入し、大きいものは食べやすいようにぶつ切りにして与えていました。

繁殖への取り組み

91年より巣箱を設置し、繁殖を目指しましたが、残念ながら途中で3羽が死亡してしまいました。

ヘビクイワシは雌雄判別が難しく、死亡した個体は解剖の結果3羽共雄であったことから、残った2羽の性別が問題になりました。改めて文献等を調べ直した結果、雄雌で間違いないということで、本格的に繁殖に取り組み始めました。

まず、給餌のとき以外の禽舎への人の出入りを極力減らし、放飼場の手入れも中止し、笹などが伸びてきてもそのまま放置しました。結果として、来園者の目から姿を隠すことができ、繁殖に専念できる環境ができました。



ヘビクイワシの禽舎

初めての産卵

ようやく落ち着きの出てきた96年1月に雌が木の枝をくわえている姿を見かけ、あわてて巣箱に巣材として木の枝を入れ繁殖の準備をしました。

5月に入ると2羽で、巣材を運んだり巣箱で巣材をいじっている姿が見られるようになりました。そして、5月27日に待ちに待った卵を発見しました。この時の感動は、何年飼育係をやってもなかなか味わうことのできないものです。その後、5月28日、6月2日と計3個の産卵が確認され、抱卵が開始されました。

産卵、抱卵とくれば、次は当然孵化。より慎重に対応しましたが、6月24日・7月15日と卵が割れてしまい、残った1個を取り上げ調べてみると中止卵でした。期待が大きかっただけにさすがの私もショックでした。

失敗の原因と改良

すぐになぜうまく行かなかったのか話し合いをしました。そ

の結果、この年は雨が多く、雨漏りがあり抱卵に悪影響を与えたのではないかとということで、10月に雨よけの屋根を作り替え同時に壊れた巣箱を直しました。

巣材は、今回木の枝の上に放飼場内の雑草等を敷き詰めていたので、97年4月初めに、巣箱に木の枝を入れるとともに、雑草の変わりとして巣箱の近くにワラを置きました。これは、巣材を自分たちで運ぶことにより繁殖行動の刺激になるようにと考えたためです。

二度目の産卵

4月30日に待望の産卵が見られ、5月2日には計2個の卵を確認しました。抱卵は、96年と同様雌雄交代で行っていました。

5月下旬から6月上旬にかけて巣を離れている姿が多く確認され、今年も失敗かと思ひ孵化予定日である6月16日に巣箱をのぞいたところ嘴打ちが始まっていました。翌17日の朝、2羽のヒナを確認したときには、半ばあきらめていただけに喜びもひとしおでした。

ヒナの成長

孵化してしまうと、次なる心配事は無事成長してくれるかということ。初めての繁殖ということで、親を刺激しないように注意しながら定期的にヒナの成長を観察しました。また、一般への発表はある程度目途がたつまではとひかえました。

孵化当日ヒナは、全身白く薄い綿羽で覆われていましたが、顔は親と同じく目の周囲が黄色く皮膚が裸出していました。

孵化後、両親はよくヒナの面倒を見て、給餌直後には2羽でヒナにエサを与えている姿をよく見かけました。

一週間もたつと親が巣を離れる時間が長くなり楽に観察ができるようになりました。またこの頃よりヒナの大きさに差が出始めました。

成長の早いほうのヒナをNo.1、遅いほうのヒナをNo.2として詳細な成長記録を別表に示しました。



9月9日現在のヒナ

4週齢の頃2羽の成長に約2週間の差が付いてしまいました。この時、人口育雛に切り替えようかということも話し合いましたが、人が手を入れる事により2羽共駄目になるかもしれないという心配もありました。最終的にNo.1だけでも育てほしいということになり、No.2にもエサが行き渡るようにと給餌量を増やす以外は手を加えませんでした。その後、No.2も持ち直し無事成長しました。

No.1が87日令、No.2が91日令でそれぞれ巣立ちました。

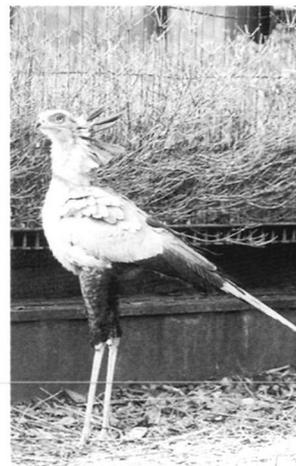
巣立ち直後、ヒナはエサを親と同じエサ入れから自分で直接食べたり、親がくわえた物を貰ったりしていました。このときまだうまくバランスが取れないのかふらついて親と異なり座ったままの姿勢で食べていました。

98年1月現在、無事に成長し7ヶ月齢となり放飼場内を我が物顔で歩き回っています。ヒナは、全体的にややくすんだ色をしており、クチバシは黒色で（親は灰色）、親との区別がはっきり付きます。また、放飼場内の笹などの植栽も刈り込み見やすくなりましたので、足を止め親子の違いを比較してみてもいいかでしょうか。

今後は、ヒナのクチバシの色及び、体全体の色が成長するにしたがってどのように変化していくのか、またヒナが同居している場合次回の繁殖にどのような影響を与えるのかを注意深く観察していきたいと思います。



1月現在のヒナ No.1



1月現在のヒナ No.2

別表 ヒナの成長

日令		
1	◎2羽孵化。全身白く薄い綿羽で覆われている。皮膚はピンク色。	
3	◎目が開いている。	
5	◎目の周囲は黄色く皮膚が裸出している。上クチバシは黒く、先端及び下クチバシは黄色。 ◎脚はピンク色。大きさに差がつき始める。	
8	◎親が巣を離れている時間が長くなる。	
	No. 1	No. 2
	○白い綿羽が抜けまばらになる。頭部がやや黒くなる。	
13	◎給餌確認。親が吐き戻しを引きちぎり給餌。	
14	○親の吐き戻し（鶏頭半割り）を自分で食べる。	
16	◎大きさにかなり差がつく。 ○クチバシの黒色がはっきりする。頭部から背、腰、翼の表が黒っぽくなる。冠羽がでてくる。	●白い綿羽がまばらになる。頭部がやや黒くなる。
	○ふしよで立ち、しっかりと上体を起こす。	
18	○巣箱から頭部がでる。	
21	○背側はグレー、腹側は白い綿羽で覆われる。 頭部、首前面に本羽がでてくる。腿が黒くなる。	●頭部から背、腰、翼の表が黒っぽくなり、グレーの綿羽がでてくる。クチバシの黒色がはっきりする。
	○頭部の羽はほぼ完成。風切り羽、尾羽がでてくる。 翼のつけ根に本羽がでてくる。	●背側はグレー、腹側は白い綿羽で覆われる。
36	○首、背、翼及び腹部に綿羽が残っている。 ○腿に黒い本羽がでる。冠羽が伸びてくる。	●頭部、首前面に本羽がでてくる。腿が黒くなる。 風切り羽がでてくる。
	○首の側面、背、翼に綿羽が残る程度。 中雨覆に黒い線がある。	●頭部の羽はほぼ完成。
49	○羽完成。冠羽、尾羽（中央）は短い。	
56	○冠羽が伸びてくる。尾羽（中央）が伸びてくる。	●羽完成。冠羽は短い。尾羽は見えない。
	○立上がり羽ばたきをする。	
63	○冠羽完成。尾羽（中央）はまだ短い。	
68		●冠羽が伸びてくる。尾羽がでてくる。
		●立上がる。
73	●冠羽完成。尾羽（中央）が伸びてくる。	
78	●尾羽（中央）はまだ短い。	
87	○巣立ち	
91	●巣立ち	

○…ヒナNo.1の成長の変化 ・ ●…ヒナNo.2の成長の変化 ・ ◎…その他

伴野 修一 (Syuichi Banno)

DNAのお話②

クジラの仲間はだ〜れ？ “分子生物学から見た分類”

クジラはほ乳類でありながら水中へ進化の道を試み、最も成功したグループです。しかし、クジラは海に生息し、形も魚に似ていたため、1758年、有名な分類学者であるリンネが、ほ乳類として分類するまで、魚とみなされていたのです。それではいったいどんな動物から進化してきたのでしょうか？いろいろな化石や分子生物学の両方から、堅い蹄をもった有蹄獣（ウマやウシ、ブタなど）の共通の祖先から進化したことは、すでにわかっています。その後、研究が進み、有蹄獣はウマのような蹄が奇数のものと、ウシの様に蹄が偶数のものがありますが、ウシやブタのような偶蹄類の共通の祖先から進化したと考えられるようになりました。しかし、これらの種をアーウィンらが、核の外にあるミトコンドリアと呼ばれる器官のDNA（ミトコンドリアDNA）のチトクロム遺伝子を、ガトシーらは細胞のなかにある核のDNAの乳のカゼイン遺伝子を比較したところ、クジラとカバが近い関係にあることがわかりました。彼らは、クジラもカバもシカもウシもブタもラクダも一つの祖先から進化したとする、今までの考え方に異論を唱えたのです。これを解明すべく、東京工業大学の岡田教授らに協力して私たちは、サイン（レトロポゾン）と呼ばれる核のDNAの中に散らばってある反復を繰り返す短い配列について調査しました。

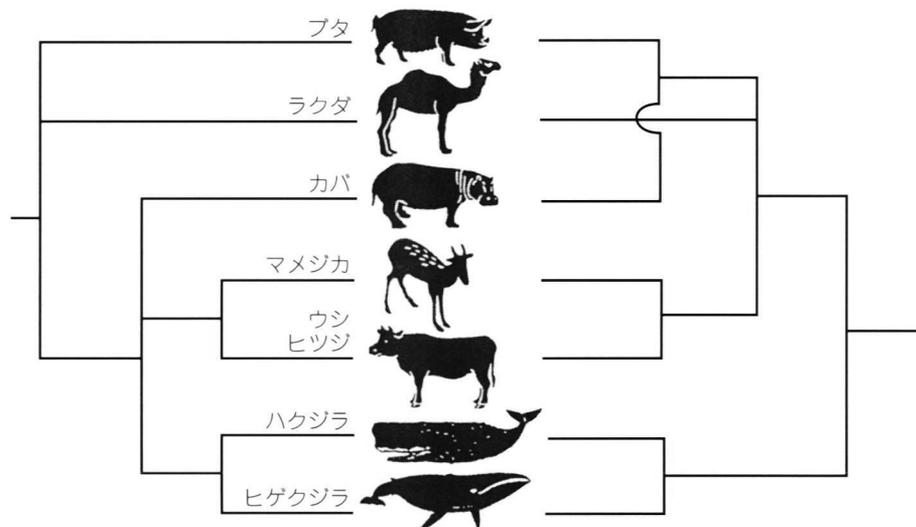
サインについて説明しておきましょう。

私たちが生命を維持していくためには、DNA配列の中に組み込まれた遺伝情報を、DNAからRNAに変換し、次に、RNAから蛋白質に翻訳されなければなりません。ところが、変換されたRNAが蛋白質に翻訳されず、DNAに逆変換され、もとの配列に組み込まれてしまうことがあります。このような配列のことをサイン（レトロポゾン）と呼びます。このような現象は、40億年前、生命の起源とされるRNAが持っていた遺伝

情報（現在のRNAは持っていない）を、DNAに渡してしまったのです。ですから情報を蛋白質に変換する時、RNAを経由するのはこの名残りなのです。同じ方法で、遺伝情報に変化を持たせるため、ほ乳類では数十万年単位で起こるとされています。組み込まれた配列は二度と無くなってしまふことはありませんので、比較した動物の同じ所に同じサインがあれば同じ祖先から分かれたこととなります。幾つかのサインを調べれば、その種がどの段階で分化したのかわかります。しかし、化石や遺伝子の突然変異を調べる方法では枝分かれした年代もわかりませんが、サインでは枝分かれした年代はわかりません。しかし、分かれた順番を正確に調べることが出来ます。このサインは、クジラ、ウシなどの反芻獣、カバのそれぞれのDNAに存在するサインはラクダやブタにはありませんでした。そこで、さらにクジラ目と偶蹄目が分かれていく過程で起こったと考えられる逆転写（サイン）についてもっと範囲を広げて調べたところ、9つの点で生じていたのがわかりました。このそれぞれのサインについて偶蹄目に分類されるウシ、ヒツジ、キリン、シカ、マメジカ、カバ、ブタ、ラクダとクジラ目に分類されるミンククジラ、ザトウクジラ、マッコウクジラ、ツチクジラ、イシイルカ、バンドウイルカ、コビレゴンドウなどについて調べたところ、ブタやラクダに無くてクジラ目やウシ、カバに有るサインが3種類見つかりました。このことから偶蹄目はブタのグループ、ラクダのグループ、カバ・ウシ・クジラのグループに分かれることがわかりました。また、クジラはカバやウシの共通の祖先から分かれたこともはっきりしました。今までの分類ではクジラ、イノシシ・カバ、ウシ・シカ、ラクダの4つのグループが共通の祖先から直接分かれたことになっています。

尚、今までカバはイノシシのグループとされてきましたが、クジラやウシに近いこともわかりました。近い将来、クジラ目と偶蹄目の分類を変えなければならなくなったようです。

宗近 功 (Isao Munechika)



今回解明されたクジラの系統樹

今までのクジラの系統樹

子ども動物園へようこそ

Welcome to Children's Zoo

ートピックスー ゾ・ウ・ガ・メ

果てしなく続く青い海と太陽の満ちあふれる陽光の島が200kgにもたっしようかというゾウガメの故郷（ふるさと）なのです。ゾウガメには、ご存じガラパゴス諸島に分布するガラパゴスゾウガメと当園でも飼育されインド洋上に位置するセーシェル諸島などに分布しているアルダブラゾウガメがいます。

とくにガラパゴスゾウガメはダーウィンのビーグル号で一躍有名となりましたが、「進化の島」の代表的生物種も昔をひも解くと安泰なものではなく、むしろ悲劇の連続であったようです。



捕鯨船が島々に立ち寄るようになり、動きの鈍さや長い船旅にも十分耐えることから、新鮮なタンパク供給源として乗組員たちの胃袋に納まったことは、ゾウガメの減少に拍車をかけました。たいへん残念ですが、当時の航海日誌によると合計1万匹以上のゾウガメの積み出しの記録が残っています。おなじ仲間のゾウガメがこのような不運な過去をもっていたとなれば、その種を絶やす訳にはいきません。ギネスブックの中に世界一大きな陸ガメはアルダブラゾウガメであるとの記述もあり、長寿の代表で152年生きた例もあります。当園のアルダブラゾウガメもさぞや動物園や時代の急激な様変わりや驚きつつ、甲羅のなかから、長い首をにゅ〜と伸ばしながら見守ってゆくことでしょうか。子ども動物園内では放飼場の泥水に首まで浸っているゾウガメが、樹上の艶やかなコンゴウインコと対比されて展示されていますので、その自慢の大きな甲羅に触れて、おなじ仲間の「不運な過去をもつ先祖たち」を今後も励ましてゆこうではありませんか。 牧野 辰男 (Tatsuo Makino)

生活科実習をふりかえって

「生活科実習」も今年で5年目を迎えました。この実習は、小学校1、2年生の「生活科」の授業を私たち子ども動物園のスタッフがお手伝いする、という目的で始めました。

たくさんの方の学校の実習をお手伝いする過程で、学校側からの希望のほとんどが、「飼育のお手伝いをしたい」「モルモットやウサギなど小さな動物と触れ合いたい、エサをあげてみたい」ということを私たちは知りました。

しかし、電話やFAXでのやりとりを経て、実際に現場を見てもらったり、他の学校の実習内容をビデオやお便りなどで知ってもらい「事前の打ち合わせ」を行う段階になると、序々に「子ども達に1種類でいいから、どんなお世話が必要なのか、じっくりと知ってほしい」「カメの飼いかたを教わりたい」「飼育に使う道具を知りたい」など、具体的になっていきます。また、同じ先生が続けてこの実習に取り組んだり、あるいは学校の年間行事として取り組むようになるなど、この実習に力を入れている先生や学校も増えてきました。やはり私たちが行なう活動には蓄積が必要で、これまでの130校あまりの実習を経たからこそ、打ち合わせの内容も具体的なものになっていると思います。

これまでの実習で印象的なのは、「実習」の前後での取り組みが豊富に行われた学校が少なくないという事です。

ここにご紹介するのは、ある小学校2年生の子ども達による「手作りガイドブック」の一部です。自分たちで作りたい、という希望により取り組んだとの事です。これをみると、わずか1時間足らずの実習なのに、子ども達がどれだけ真剣に実習に参加していたかがよくわかります。私たちも、少しずつ実習の内容に工夫を加え、このような子ども達の真摯な姿勢に応えていきたいと思っています。

並木 美砂子 (Misako Namiki)

小動物コーナー日誌より

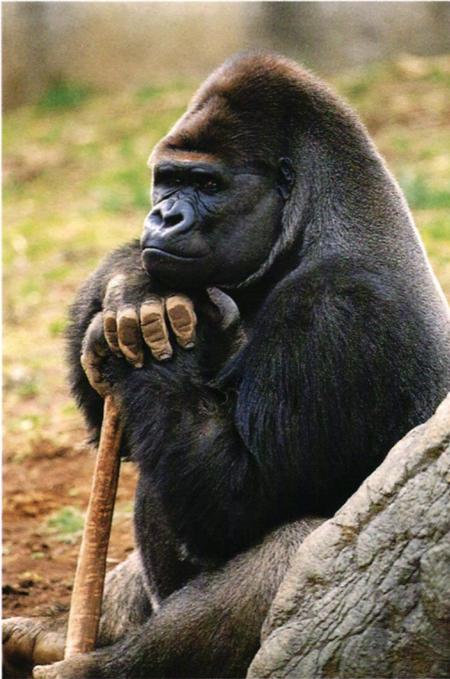
父「このネズミはオトナになるとモルモットになるんだよ」
子「ふ〜ん……」
係「なりませんよ……」
父「えーっならないんですか？」（とびっくりしていました）
幼稚園ぐらゐの男の子
「ネズミはアヒルから生まれるんでしょ？」
係「……」
おかあさんと子どもの会話 テンジクネズミを見ながら
子「これ、何ていうの？」
母「テンジクネズミっていうのよ。モルモットが大きくなる
とテンジクネズミになるのね」
テンジクネズミをさわっていた男の子
とつぜん……
「このモルモット生きてるよ」
といて後ずさりしていました

おたよりコーナー

千葉市立弥生小学校2年生のみなさんからの
手作りガイドブックです



平成9年度写真コンクール入賞作品
PHOTO CONTEST



金賞 △ボス
坂倉 徹

銀賞

▷
ぞうどよろしく
大元 一洋



▷
遠くからきました
大森 加恵



銅賞 △
花への好奇心
渡来 次男



△
絆
鈴木 勉



△
森の賢者
石田 美香子



小・中学生
金賞

◁
迷路から出られた
海老原 幸恵

ファミリー賞

▷
たべたい。
たべたい。
関口 昌明



動物公園の動物…②②

Animals in the Chiba Zoological Park

オセロット

オセロットは、北はアメリカ・テキサス州南西部から南はアルゼンチン北部まで、南アメリカを中心に広く分布する美しいヤマネコです。熱帯林からかなり乾燥した低木林まで、非常に幅広い環境に生息しています。本格的なフィールド研究は、1980年代になって始まりました。それまであまり知られていなかった彼らの生態が、次第に明らかになってきたのです。当初、樹上性であると思われていたのですが、実際はほとんど地上性で、休息時に樹上を使うだけなのです。夜行性で、なわばりを持ち、1日12時間も聞き耳をたてて歩き回りながら獲物を探し、また獲物がいそうなところに待ち伏せたりしてハンティングを行います。獲物はほとんどが小型のげっ歯類や爬虫類です。雌は1回の出産で1～2頭の子供を産みます。生まれたばかりの子供は体重250g。オセロットは中型ネコ類の中では最も成長の遅いものの1つです。雌のみが子育てをし、子供は1年以上母親を頼るために、雌は1年おきにしか出産しません。1日の大部分を狩りに費やすオセロットにとって、数少ない子供を長い期間かけて育てることは理にかなっているのです。オセロットは生息域が広いので、非常に適応力の高い種であると思われていたのですが、実際は、繁殖力が低く、小型げっ歯類を狩るための密生した植生を必要とする、特定の環境に適応した種だったのです。



オセロットはその美しさのために、大きな災難を経験しました。1970年代に入り、トラやジャガーなどの大型ネコ類が、毛皮目的の狩猟のために絶滅に瀕していることに、世界中が関心を持ち、これらの動物の毛皮の不買運動が起こりました。これがオセロットには災いしました。毛皮業者は、より手に入りやすくなった大型ネコ類の代わりに、オセロットを標的にしたのです。1970年代には14万枚の毛皮が取り引きされました。これは、オセロットのなわばりの広さを考慮すると、実に35万km²になり、ほぼ日本の総面積（約38万km²）に相当する森林からオセロットが消滅したことになるのです。1975年より実施されたCITESでは付属書Ⅱ、そして1989年には付属書Ⅰに引き上げられました。これによって、毛皮目的の乱獲からは免れることができましたが、生息地の破壊という、より大きな試練が彼らの未来を脅かしています。

松本 和人 (Kazuhito Matsumoto)

動物公園の植物…⑫

The plants in the Chiba Zoological Park

サルスベリ

サルスベリは、ミソハギ科サルスベリ属の落葉小高木です。高さは3～9mになります。

原産は、中国南部で江戸時代以前に渡来したといわれ、別名を「百日紅^{ひゃくじつこう}」といいます。

百日も紅の花が咲くという意味でしょうが、実際は半分くらいが開花期間のようです。品種によっては、7月から10月上旬までの長い間、花を見ることができるともあります。

花の咲く時期は、高浜虚子が「炎天の地上花あり百日紅」と詠んでいるとおり、猛暑の候、キョウチクトウ（千葉市の花木）や、ムクゲ、フヨウとともに夏を代表する花木でもあります。

自然樹形では、枝は湾曲しながら伸び、横広がりになり樹冠が、ちょうどよく、しのぎやすい木陰をつくります。

庭などに植えると幹の明るい色調とともに、涼しさを感じさせてくれます。



枝を太い部分で切ったものを見かけますが、無骨な枝ぶりには、似合いません。

漢名は、紫薇（花）といい、中国では、禁廷（宮廷）に植えられた花木だそうです。日本では、多く寺院の庭に植えられています。中国にならったのではないかと、ともいわれています。

花は、円錐花序で、紅・ピンク・白など、なかでも白の花は、珍しいとされています。花弁は6枚で、縮み模様の特徴があります。英名「クレープ・ミルトン」も夏の肌着素材のクレープ（ちりめん）からきているそうです。

幹は、淡褐色の薄い樹皮で、はがれ落ちると、きわめて滑らかで白い木肌が現れます。猿が滑りそうな幹であることが、和名の語源とされています。当園は、サルもいて真相を調べられる条件は整っていますが、いまだ実行していません。（…笑）ともかく、名前のおり納得できる様子をした樹木です。わが国では古くからサルスベリの名はナツツバキやヒメシヤラの名であったともされ、混同する場合もあるようです。

葉は、倒卵形で対生し柄はほとんどありません。うどんこ病に弱く、夏の後半には葉を落としてしまいがちですが、日本やアメリカで育成された品種のなかには抵抗性があり、落葉が少なく花と幹肌に加えて紅葉も楽しめるものや、コンテナ（容器）用の小型品種で、狭い場所でも観賞できるものもあります。

齋藤 哲朗 (Tetsuro Saito)

動物公園日誌から

From Zoological Park Diary

'97年7月1日～'97年12月31日

- 7月2日 モウコノウマ、シマウマ2種に、腰麻痺予防薬投与
- 7月3日 ムギワラトキ(雌)、巣台から降りる
- 7月4日 アオエリヤケイ(雄1羽)、死亡
- 7月7日 ツバメガン他6種16点、動物交換で搬出
ウシ2品種、動物交換で新着
- 7月8日 中学生職場訪問あり(千葉市立幸町第二中学校)
ヘビクイワシ繁殖についての記者発表
- 7月9日 ヘビクイワシ繁殖に関する取材撮影あり(日本テレビ、千葉テレビ)
- 7月14日 エリマキキツネザル(1頭)、繁殖
- 7月15日 高校生活の話題(千葉テレビ)番組の撮影あり
7月22日、7月24日にも撮影あり
- 7月19日 日本大学学生、本日より学芸員実習開始(31日まで)
- 7月21日 ホオジロカンムリヅル(雌1羽)、頭部打撲で死亡



- 7月23日 第13回サマースクール開催(25日まで)
- 8月1日 オオサマペンギン、換羽開始
- 8月3日 チリーフラミンゴ(雄1羽)、敗血症で死亡
東京農業大学学生、本日より学芸員実習開始(17日まで)
- 8月6日 中学生職場訪問あり(千葉市立朝日ヶ丘中学校)
ホオカザリヅル(若)、性別チェックの為採血
- 8月13日 シロガオマーモセツト(1頭)、繁殖
- 8月19日 習志野市教育研究会生活部会研修あり(参加者7名)



- 8月21日 カオムラサキラングール(雄1, 雌1)、スリランカ国立動物園より受贈

- 8月21日 カンムリバト(雌1羽)、新着
- 8月24日 北里大学学生、本日より獣医実習開始(9月5日まで)
- 8月26日 ハシビロガモ(雌4羽)、動物交換で新着
- 8月30日 ムフロソ(雄1頭)、熱中症で死亡



- 9月1日 アビシニアコロブス(キクユ)(1頭)、繁殖
東京農業大学学生、本日より学芸員実習開始(14日まで)
- 9月4日 敬老の日にちなみ、長寿動物(ニシローランドゴリラ雄ゴロ)についての取材あり(東京新聞)
ゲルディーモンキー(雌1頭)、子宮脱で死亡
- 9月11日 ヘビクイワシ(雌1羽)、巣立。自力で餌鉢から採食するのを確認。雌2羽目は、15日巣立
- 9月16日 園内採集メクラヘビについての取材あり(読売新聞)
- 9月20日 カリフォルニアアシカ、幼獣以外、フィラリア予防薬投与
「動物愛護週間特別講演会」開催 —アジアのゾウ—
(講師 副園長 宗近 功)
- 9月26日 中学生職場訪問あり(千葉市立新宿中学校)
- 9月28日 「ワンポイントウォッチング」開催(ビッグミーマーモセツト)
- 9月29日 マナヅル、本日よりアジア放飼場へ展示替える
- 10月1日 モウコノウマ、ムフロソに腰麻痺予防薬投与
- 10月2日 アカハナグマ(雄2, 雌1)、繁殖
- 10月6日 ホンドザル(全頭)に、破傷風ワクチン接種及び今年生れの仔に入墨とマイクロチップうめこみ
- 10月8日 第7回ゾウ会議に、秦飼育課長、浅野出席(9日まで、東京都多摩動物公園にて)
- 10月11日 「アニマルスクール」開催 —消化について—
(講師 飼育課 松本 和人)
- 10月14日 本日より馴化施設小部屋屋外ケージ取り替え工事開始



- 10月18日 「折り紙教室」開催

- 10月18日 中学生職場訪問（千葉市立緑ヶ丘中学校）
- 10月20日 園内、全域停電（年次定期検査のため）
- 10月21日 第10回種保存会議に、宗近副園長、小林飼育第一係長出席（22日まで、浜松市にて）
- 10月25日 「ワンポイントウォッチング」開催（エミユウ）



- 10月26日 「動物をはかる会」開催（千葉市計量検査所と共催）
ワオキツネザル（雄1頭）、動物交換で、搬出
- 10月28日 ハシビロコウ（雄1、雌1）、動物交換等で新着
- 11月3日 「秋のZOOクイズラリー」開催
- 11月4日 午後から、アカハナグマ（雌）をオープン展示にすると仔3頭は、少しの時間だけ、展示場にでる
- 11月8日 コサンケイ（若雄1羽）、死亡
- 11月10日 隔離中であった新着のカムリバト（雌）、本日よりパードホールに展示開始
マーモセット類（全頭）に、駆虫剤投与
- 11月11日 ハシビロコウ（2羽）、検疫明けで屋内展示場に移動
- 11月12日 麻布大学学生、本日より学芸員実習開始（25日まで）
- 11月13日 千葉市獣医師会、子ども動物園を中心に研修会開催



- 11月15日 「動物公園写真コンクール授賞式・記念講演会」
（講師 吉野 信 氏）
ハシビロコウ（新着のペア）、室内で一緒にする、よく鳴きあっている
- 11月18日 ゾウ、雄が雌にマウントするのを3回確認
- 11月21日 中学生職場訪問あり（千葉市立千草台中学校）



- 11月23日 セーブルアンテロープ（雄1頭）、繁殖
「ワンポイントウォッチング」開催（アメリカビーバー）
- 11月26日 オオカナダヅル（雌）、上嘴を折ると同時に右翼骨折のため、展示をやめ入院とする
- 11月30日 オグロマーモセット（1頭）、繁殖
- 12月1日 第45回動物園技術者研究会に、伴野出席（4日まで、高知県立のいち動物公園にて）
- 12月2日 カリフォルニアアシカ（雌1頭）、急性呼吸不全で死亡
- 12月3日 アミメキリン（雄1頭）、心不全で死亡
- 12月5日 パタスザル（雌2頭）、動物交換で新着



- 12月6日 「クリスマス音楽会」開催
- 12月15日 動物交換で、セスジクスクス（雄1頭）、オウギアイサ（雄1羽、雌2羽）搬出、ワオキツネザル（雄1頭、雌2頭）新着
猛禽、キジ・ヤケイ類、全羽ニューカッスル予防接種実施
- 12月16日 アフリカハゲコウ（雌1羽）、避寒のため、春まで展示休止
- 12月17日 ブタオザル（雄1頭）、多臓器不全で死亡
千葉県自然保護課主催により、東京湾油流出対策、図上訓練実施
- 12月19日 コノオビアルマジロ（雄1頭）、肺炎で死亡
- 12月28日 ホオカザリヅルの種卵2個、東京都恩賜上野動物園より譲り受け、孵卵器に入卵する



オシドリ